慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハンス・ペーター著 現代経済理論の任務 Aufgaben der Wirtschaftstheorie der Gegenwart" Stuttgart,1933.
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.10 (1934. 10) ,p.1615(143)- 1622(150)
JaLC DOI	10.14991/001.19341001-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19341001-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

附記

參考書目としては本文註に掲げたるものゝ外に、本誌に掲載せる拙稿「英國急進運動第一期概觀」の執筆に際して參考せる諸著及び論文を參考とした。

ハンス・ペーター著「現代經濟理論の任務」

„Aufgaben der Wirtschaftstheorie der Gegenwart" Stuttgart, 1933.

氣賀健三

茲に紹介せんとする一書はペーターが以前に「理論經濟學の根本問題」と題して著せる謂はゞ經濟原理に對する入門書である。即ち「根本問題」の中では、ペーターは專ら價値價格及び利潤等の問題を取扱つたのであるが、後著では之に對する理解を深からしむる爲に專ら方法論上の問題を論じたのである。

元來方法論なるものは、之に據つて論ぜんとする其當該科學の內容が一應了解されて居らなければ之を論じても價値なきものである。如何なる目的の下に何を研究するのかが判らなければ如何なる方法が最も適當であるかは斷定せられる筈がないのである。從つて經濟學方法論は研究者が一通り經濟學の內容に精通して然る後に之を爲すべきものと云はねばならぬ。

併し、之と同時に方法論は當該科學の據つて立つ其基礎を提供し、其性質を決定するものであるから、經濟學上の問題を論議する爲には豫め方法が定められて居らなければならぬし、又諸種の採用すべき方法に就て理解を持つて居らねばならぬ。此意味に於て經濟學方法論は經濟學の具體的內容に立入るに先立つて論究せられねばならぬ性

ハンス・ペーター著「現代經濟理論の任務」

質のものと言ふべきである。

方法論に於ける此一見相矛盾するの觀ある二つの特質は筆者の觀る所に據れば斯學研究の當初に際して其理解の容易ならざる感を深からしむる一つの重要な原因である。

蓋し一個の體系を爲せる經濟學說は、其記述の中に、明白な方法論上の論議を載せたると否とに拘らず、當然一定の研究方法の制規に從へる筈のものであつて、一個の體系としての其特質を決定する所の方法を理解する爲には吾人の側に於て相當の豫備知識を有して居らねばならぬのである。

加ふるに、學說史上に於ても方法論研究の發達は比較的後世に屬し、其內容は多岐多端に分れ論爭頗る激しく種々雜多な方面に亘つて居る爲、方法論の何たるかに關する理解すら當初に在つては困難を感ずる。

茲に紹介するペーターの著は、斯くの如き困難を覺ゆる人々に取つては、其理解を容易ならしめ、且つ又之に統一と秩序とを與へる效果を有すべき一好著であると信ずる。

次に此書の內容を略述する。

ペーターは經濟學が屢〻誤解せられ、誤つた判斷を下されて居る主要な原因として、方法論的混亂を擧げて居る。

ペーターに據れば經濟學は三種の部門に分たれ、それ〴〵獨特の方法を採用すべきであるのである。歸納的並に數學的方法を用ひる純粹理論、一定の目的設定を伴ふ規範的實際的經濟學又は經濟政策、及び經驗的研究方法を取る經濟史即ち之である。此三者は各自の領域に於て獨特の意義を有するものではあるが、然も全體中の一部分として互に他の協力なくしては存在不可能のものと考へられる。此三者の關係と限界とを明にするのがペーターの著書の主要目的である。

研究方法如何に依る斯る區別は嘗て研究對象の性質が研究方法を規定すると考へられたる分類法に對して頗る進歩せるものであり、正に尊重すべき區分であると信ずる。

彼は先づ理論と政策との關係を論述する。

ペーターに據れば經濟理論は經濟の存在關係に關する敎義であり、經濟政策とは目的・理想に關する敎義である。兩者の相違は英國古典學派の運命に於て之を明瞭に見ることが出來る。古典學派は政策上に於ては自由主義を稱へた。併し古典學派の理論から自由主義的要請を齎らすことは、或偏見又は思惟上の誤謬を犯さぬくては不可能である。理論から政策的要求を導出することは、理論の本質に反する。此誤謬、此未證明前提は何であるかと言ふに、ペーターの說く所に據れば自由競爭の假定に外ならぬ。

古典學派に在つて、自由競爭の假定は理論上の一つの虛構として利用された。斯樣な假設を利用することは勿論理論に於ける方法として正當である。錯雜せる現實の事象を或一面から觀察するに當つて、より單純なる抽象的模型を思惟上に構成することは蓋し理論的研究に必要欠く可からざる方法であり、其爲には研究上の假說は必要である。

然るに此假設は古典學派に依つて同時に政策的要請として利用せられた。而して此處に自由主義と古典理論との關聯が存するのである。自由主義は政策上の目的として自由競爭を要求する。然も之は古典學派隆盛時代に於ける英國の資本主義的企業家の希望に外ならぬものであつて、決して理論其自體からして其正當性なり必要性なりを證明せられ得るものではないのである。

古典學派に於ける此混同を指摘したのは歷史學派の功績である。

即ち歷史學派は古典學派に於ける如き政策の絕對的妥當性を否定し、其代りに目的の相對性の原則を樹立したの

である。併しペーターの見る所に據れば單に相對性の原則を擧止するのみでは不充分である。目的設定の相對的なる所に在つては、其決定は結局權力の問題に歸着する。併し權力は其道德的內容を常に一つの理想から得て來るのであつて此理想に就ては何等の議論も無いのである。

ペーターに據れば斯くの如き理想の論理的性質を論ずることは倫理學又は法律哲學に屬する所である。經濟理論は目的設定には全く無關係である。自由競爭の經濟社會の法則を說明することが理論の任務では無いのである。理論の對象たる經濟社會は如何なるものであつても構はない。唯、之を抽象的模型に構成し、其模型的經濟社會に於ける一定法則を說明するのが其任務である。

然らば理論と政策は全く無關係であるかと云へば、曩に述べた如く決して左樣なことは無い。政策に於ては目的設定が先づ第一であるが此目的達成の爲には採る可き手段の合目的性如何が問題となる。合目的性如何は然るに因果關係が明瞭に了解せられて居らなければ之を判斷し得ない。斯る判斷を下すことは則ち理論家の任務である。此處に兩者の密接な關聯があり又同時に其限界がある。

ペーターは次に經濟理論の方法に就て說明する。理論の採る可き方法の問題こそは實に從所謂る方法論として論議され來たつた所のものに外ならない。其最も有名なるは歷史學派と古典學派との間に交された論爭である。其問題は、理論の據る可き手段として演繹的方法を採用すべきか歸納的方法に依據すべきかといふことであつた。歷史上に於ては、此論爭は結局兩者の間に妥協が生じ、決定的落着を見るに至らなかつたが、ペーターは、此、謂はゞ相對立する二つの方法が相互補充的關係に於て理論的研究の爲に必要欠く可からざるものである次第を頗る明快に述べる。

吾人は經驗的對象を觀察して理論的一般的命題に達せんとする。此爲に必要な方法は先づ所謂る歸納的推論である。歸納的方法とは換言すれば個々より全體を推す、結果より原因を探るといふ方法である。然るに斯種の推論のみに依つては一般的妥當性を備へたる命題は之を得ることが出來ぬ。蓋し全體に妥當するものは個々のものに妥當するとは云へるが、其逆も亦眞であるといふことは出來ないし、又原因が一定すれば結果は一定すると言へるが、其逆の推論は是認する譯にはゆかぬのである。唯、若し個々のものゝ一切を觀察し盡したならば、其時には個別的なるものに當嵌ることが一般的なるものに就いても必ず妥當するであらうが一切の個別的なるものを殘らず觀察することは不可能といつても差支えないであらう。從つて歸納的推論のみにては全體に就て又は因果關係に就て確實なる判斷を下すことが出來ぬ。吾々が前以て一定の因果關係を知つて居る場合に初て斯樣な斷定を下すことが出來る。然るに此關係は吾人が究明せんとする當の未定の對象である。

ペーターは此處に此困難を救ふ手段として論理上の假設を持出して來る。假設とは即ち原因と結果に關する或可能的關係、或根據の推定に外ならぬ。

然らば此假設は如何にして見出し得るか、ペーターは之には特に合理的規定は無いと答へる。唯、「吾人が其對象を知ること精しく、其問題に立入ること深ければ深い程、益〻確實且つ容易に之を發見することを知るであらう」（該書二二頁）と言つて居る。

斯る假設の上に立つて吾人は演繹的に推論し、現實の錯雜せる現象の分析說明を可能ならしめる。之と同時に假設は常に歸納的觀察に依つて精確にせられる必要がある。從つて斯る假設の上に立つ古典學派の理論は決して歷史學派と矛盾するものではない。ペーターの言を藉りるならば「兩者は協力して初て全體に從ふのである」（同書二二

頁）。

ペーターは之に次いで純理論の具體的問題を擧げるのであるが之には別に取立てゝ指摘すべき特色は認められぬ。價値論、價格論利潤論及び貨幣、信用の理論景氣變動の理論等が其主要内容を構成する。

其次の節に於ては政策の問題が論ぜられる。此處に於ては「或一定の政策上の理想に可及的一致する樣に經濟的過程を進行せしむる爲には一定の狀態の下に於て如何なる干涉を爲すべきやゝ（同書二六―七頁）が問題と爲る。嘗ては不干涉、自由放任・自然的秩序の狀態が理想狀態であつた。然るに斯る政策の結果は階級的不平等を促進するに役立つのみの結果となつた。此處に於てペーターは現代獨逸の國民社會主義の理想を謳歌せんとするものゝ如くである。彼に依れば獨逸社會主義は個人主義の如く自利を尊重する前に共益を要求する。同時に又共產主義の如く消極的な私有財產制破壞のみを目的とするものでなく、積極的に、斯制度に干涉しつゝ國民全體の利益に沿ふ樣に、分配し直さんとするもの、全體としての國民經濟をば計畫的に指導せんとするもの、個人的利己心を尊重すると同時に國民的利益の優越を忘れぬものなのである。ペーターに據れば獨逸社會主義の斯る理想は現代經濟政策の理想とする所であるとせられる。

斯くの如き目的設定に對して現在の經濟理論は如何なる役目を果すであらうか、利己的經濟人と市場經濟とを假設と爲すともいふ可き理論は、利己心に對する共益心を强調し或種の統制的經濟を目指す獨逸社會主義の經濟政策に對して如何なる指針を提供し得るであらうか。

一見する所現代の經濟社會を支配する法則が斯くの如き假設の上に立つ理論に依つて支持せられて居る限りペーターの所謂る獨逸社會主義の理想は畢竟實現不可能の空想たる觀無きを得ぬのではなからうか。

ペーターは自ら設定せる此疑問に對して次の如く答へる。即ち嘗て舊き學說の中には、所謂るホモ・エコノミカスを以て理論的出發點と爲すものが在つたが、現代の理論に於ては、例へば主觀的價値說に於ては、斯くの如き假定は全然放棄せられて居る。それは唯人間が或秩序の下に一定の行動を取ることを假定するのであつた。此秩序は、全く形式的、論理的な假定に止まるのである。故に獨逸社會主義の理想は決して論理的に純理論に抵觸するものでなく、唯其前提が何處まで實現せられるかは事實問題と爲るのみであると。（一一九―三〇頁）

次節は近時頗る一般的に使用せらるゝに至つた「平衡」の概念の說明に充てられる。ペーターは平衡の概念をば一、經濟的、二、經濟政策的、三、社會學的平衡の三つに分ける。經濟的平衡とは、今日一般に靜止的經濟の下に於て考へらるゝ平衡である。第二のものは或一定の目的を立て之を實現する場合にのみ到達せらるゝ平衡狀態をいふ。前者が謂はゞ自然的放任の下に於ける狀態を表示するに對し、後者は或干涉の下に生ずる狀態を意味する。第三の社會學的平衡とは、平衡をば前二者の如く單に經濟的一面のみより觀察せず、社會全體として觀た場合に社會内のあらゆる勢力の均衡より生ずる平衡狀態をいふのである。

ペーターは此機會に史的唯物論を排斥する。此者の誤謬は經濟的過程をば社會的過程そのもの又は其基礎と考へたことに在る。事實經濟的過程は全體中の一部であり、之を一個の全體として觀察するのは單に方法論上の虛構に過ぎぬのである。經濟的基礎は社會的過程中の一變動的要素であり、若し社會生活の必要に適せざる時は人爲的に改變せられ得るものである。畢竟經濟的秩序は一つの制度に過ぎぬものであり、より高き理想達成の爲に採らるゝ手段に過ぎぬのである。

ペーターの斯樣な考へ方は蓋し現代獨逸社會主義の思想傾向の一面を代表するものではないであらうか。

之に次ぐ終りの二節は動態理論、並に理論と統計に就て述べて居るが此處に特記すべき程のものはない。動態理論の主要問題はペーターに據れば貯蓄、生産力の發展所得分配に對する其影響及び景氣變動である。マルクスの資本蓄積理論は此部分に於て克復すべきものとペーターは考へて居る。最後に理論と統計に就て一言すれば兩者は共に相援け合ふべき研究方法と看做される。理論と經驗とは互に補充し合はねばならぬ。理論家の採る論理的手段は歸納法であり、其方法的技術は孤立化的抽象である。經驗主義者が獨自の立場から採る方法に統計的方法がある。理論的方法の用ひられぬ場合即ち孤立化、抽象化の困難な場合に利用せられる。景氣論や經濟政策上の認識を得る爲には從つて之の利用せらるゝ場合が多いのである。併し景氣論にしても或は他の何れにしても、統計的方法のみを以てしては決して充分な結果は得られない。

ペーターは要するに、歸納的方法や抽象的方法或は又統計的方法が互にそれ〴〵の限界を有すると同時に又全體の中の各一部分として有機的に補充し合ふべきものであることを主張せんとするのである。

以上に於て彼の著書の概略を說き終つた。僅か五十頁足らずの小冊子であるが、其說く所は廣範圍に亘り簡潔にして要領を得て居り同時に又現代獨逸經濟思潮の一面を示すものとして正に一讀に値すると考へる。

最近經濟文獻

（昭和九年九月二十日調）

〔理論經濟學〕

＊社會科學辭典　森戸辰男監修（小辭典全集五卷）　四六判：……非凡閣

常識、科學及哲學（早稻田政治經濟學雜誌、三六號、昭和九・八、三五―五四頁）　酒枝　義旗

「代用の彈力性」（Elasticity of Substitution）に關する覺書―分配理論の最新用具について―（經濟學論集、四卷八號、昭和九・八、六八―八九頁）　安井　琢磨

供給曲線の性質（經濟論叢、三九卷二號、昭和九・八、一九―三八頁）　高田　保馬

貨幣の將來效用について（經濟論叢、三九卷三號、昭和九・九、一八―三四頁）　高田　保馬

リュビーモフ著松村四郎譯地代論（大原社會問題研究所雜誌、一卷二號、昭和九・八、四一―五二頁）　櫛田　民藏

岸本誠二郎氏「分配の理論」（經濟學論集、四卷七號、昭和九・七、八五―九九頁）　木村　健康

馬場氏「技術と經濟」の疑問（經濟研究、三卷三號、昭和九・九、七五―一一二頁）　安部　隆一

ゴットシャルク「購買力說」―「過少消費稅批判」（經濟學論集、四卷七號、昭和九・七、一一一―一一八頁）　田中　精一

ムース「カルテルと景氣變動」（經濟學論集、四卷七號、昭和九・七、一一五―一二〇頁）　高宮　晋

＊Bowley, A. L.: Grundzüge der mathematischen Ökonomik. Ins Dt. übert. Leipzig. 1934. 130 S. 19 graph. Darst. M. 8.

＊Bucci, C.: Nuovo equilibrio economico. Milano. 1934. 346 p. L. 20.

＊Caussin R. et H. Deby: Les principes de la distribution: vente, frais de vente, prévisions. Bruxelles. 1934. 195 p.

＊Drobig, G.: Das Kaufkraftproblem. Grossenhain i. Sa. 1934. 108 S. Berlin, Diss.

＊Dupuit, J.: De l'utilité et de sa mesure. Ecrits choisis et republiés par Mario de Bernardi. Préf. par Luigi Einaudi. Turin. 1934. 228 p. L. 40.

＊Gottl-Ottlilienfeld, F. v.: Die Läuterung des nationalökonomischen Denkens als deutschen Aufgabe. Berlin. 1934. 80 S. M. 3,20.

＊Kovero, I.: Some views on marginal utility and theory of taxation. 1934. 101 p. 9 s.

＊Perreau, C.: Cours d'économie politique. 5 éd. T. 2. Paris. 1934. 582 p.